

東レ株式会社

2020年3月期 第1四半期決算説明会（電話会議）
質疑応答要旨

日時：2019年8月9日

説明者：専務取締役 深澤 徹

本資料中の業績見通し及び事業計画についての記述は、現時点における将来の経済環境予想等の仮定に基づいています。
本資料において当社の将来の業績を保証するものではありません。

<全般>

Q. 交易条件の改善だが、18年度1年間の価格差は前期比マイナス159億円だった。この1Qでようやく少し取り戻した形になっているが、感触として2Qもスプレッドは維持できそうか？

A. 交易条件、我々はスプレッドと言っているが、ご指摘の通り昨年は原料価格の上昇に販売価格の転嫁が追いつかない状況であった。販売価格への転嫁を進めている中、19年1～3月以降原油価格が下がったことから、両方の効果によって1Qの結果が生じた。今の需給の状況が続けば、スプレッドの維持もある程度できるのではないかと。ただし、2Q以降は価格だけの話でなく、むしろ需給がどうなるかということが極めて大きい。

<繊維>

Q. PPスパンボンドの市況が2Qに戻ってくるということだが、その背景や確度は？また、エアバッグはしばらく厳しい状況が続くのか？この二つの製品について、今の受注動向を含めて詳しく教えてほしい。

A. PPスパンボンドは、昨年下半年以降かなり稼働調整を実施していたが、2Qは稼働率90%まで回復すると見ており、かなり稼働を落としていたものが若干の稼働調整程度まで回復する見通しとなっている。

エアバッグは、欧州・中国市場の需要の減速からマーケットとしては弱いと見ており、少なくとも2Qについてはある程度の減産を継続する見通しである。

<機能化成品>

Q. 機能化成品セグメントで、エレクトロニクス関連の動きにつき教えて欲しい。具体的には、バッテリーセパレータフィルムの伸び、また、光学フィルム、MLCC離型フィルム、電子部品等が良くないという話があったが、回復度合いについて教えて欲しい。

A. バッテリーセパレータフィルムは、18年度来韓国で増設を進めており、これが順調に稼働し、需要自体も自動車用途を中心に拡大している。期初に申し上げた通り、当社の出荷量は年間で前期比30%強の伸びを見込んでいるが、その線に沿った形で拡大している。

電子情報材料関連は、MLCC離型フィルムが在庫調整局面にあり、想定と比較して横ばいあるいは若干悪いという状況にあるが、それ以外の用途、例えば回路材料等は液晶テレビやスマートフォン向けで順調に拡大している。また、有機EL材料についても、スマートフォン全体の需要は前年比横ばいという状況だが、TVを含め液晶から有機ELへの切り替えが進んでおり、この流れに追従して当社の材料販売は順調に推移している。

Q. 機能化成品セグメントの1Qから2Qの市場の見通しについて解説して欲しい。

A. 機能化成品は、樹脂事業は、主力の自動車用途あるいは家電用途等で中国市場向けを含め需要が低迷している。自動車用途では欧州の需要も低迷しており、先行きは決して楽観を許さないと見ている。一方で、回路材料は、テレビあるいはスマートフォンのベゼルレス化が進むことで当社材料の使用量が増えている。また、有機EL材料は中国向けの販売も順調に拡大していることから、電子情報材料関連についていえば、ある程度好調が持続すると想定している。

Q. 先日バッテリーセパレータフィルムのハンガリーでの増設を発表したが、ポーランド等ではなくハンガリーを選定した理由は？

A. バッテリーセパレータフィルムのハンガリーでの増設について、車載用での注目市場は欧州であると見ている。これまで中国が注目されていたが、EUの環境規制強化の影響で欧

州自動車メーカー各社のEV化は加速しており、それに合わせて欧州に工場を作ることに決定した。当社は、欧州ではフランス、イタリアなど複数の生産拠点を持っているが、各国を様々な観点から比較検討した結果、最適地としてZOLTEKハンガリー工場の隣接地を選択した。21年7月に生産開始予定である。

<炭素繊維>

Q. 1Qの炭素繊維複合材料セグメントで、ドイツのコンポジット子会社および Toray Advanced Composites(TAC、旧 TenCate 社)の損益がどう改善しているのか？また、原材料のアクリロニトリルの市況は？

A. TACは、1Qはのれん等の償却を含めたベースではまだ赤字という状況である。上期ものれん等の償却を含めたベースでは赤字が継続するが、下期についてはこれらを含めてもトントンに近いベースまで回復することを想定している。そのような意味では、TACは想定通りの動きをしていると考えている。

ドイツのコンポジット子会社は18年度非常に苦戦したが、1Qの実績については生産改善が進んで期初の見通しをやや上回ったと評価している。通期は期初に見通した線に沿った形で推移すると見ている。

炭素繊維複合材料全般の価格の状況については、原材料であるアクリロニトリルの価格は18年度1Q、2Qと比較すると下がっているが、19年1～3月に価格が一旦下落した後は、また上昇しているのが19年度1Qの状況だ。アクリロニトリル価格が18年度の2Q～3Qに上昇した後、当社は値上げを行っており、その成果が表れてきていると評価している。

Q. 18年度1Qはまだドイツのコンポジット子会社が大きな損失を出しておらず、TACの連結化もなかったと理解している。ということは、19年度1QにTACとドイツのコンポジット子会社は前年同期比営業利益の悪化要因となっている一方で、航空機向け既存ビジネスの伸びと交易条件の改善により、炭素繊維複合材料事業全体の損益は改善しているという理解で良いか？

A. ドイツのコンポジット子会社の損益が大きく悪化したのは18年度2Q以降だったが、1Qも若干の赤字だった。そういう意味では18年度1Qと19年度1Qを比較した場合、若干の損益の改善があったといえる。TACについてはご指摘の通り18年度1Qと比較しマイナスとなったが、それ以外に、航空機、一般産業、スポーツとそれぞれの用途の改善により増益に転じた。

Q. 航空機の需要拡大は分かるが、マクロの景況感では様々な産業用途が弱含む中で、炭素繊維の需要は強いように見えるが、何か軽量化に向けての特殊な需要が立ち上がってきたといった、炭素繊維独自の要因はあるのか？

A. 炭素繊維の市場について言うと、15年から16年はほとんどマーケットの拡大がなかった。17年もそれほど大きな拡大はなかったが、17年から18年にかけて市場トータルとして10%程度の増加があった。19年については、産業用途では、ラージトウを使用している風力発電翼用途が引き続き堅調であることに加え、米国が大きなマーケットである圧力容器用途が回復してきている。

Q. 炭素繊維複合材料セグメントについて、上期見通しに対し1Qは順調に進捗したが、2Qに向け見ておくべきリスク要因や一過性のマイナス要因はあるのか？1Qから2Qの動きについて解説して欲しい。

A. 炭素繊維複合材料は、1Qは航空機用途で一部前倒し出荷というプラス要因があった。この点を踏まえ2Qに航空機用途の動向がどうなるかというのはある。また、炭素繊維複合材料事業はドル建て商売のウェイトが高く、為替の動きが損益に大きな影響を与える可能性がある。

Q. 炭素繊維セグメントの4Qから1Qにかけての営業利益改善プラス27億円のうち、寄与度の大きいものは何か？

A. プラス27億円の改善のうち、海外子会社の改善分がプラス30億円であるが、欧州のコンポジット子会社の利益改善がほとんどを占めている。

<ライフサイエンス>

Q. DNAチップは19年中の薬事申請を目指すと新聞報道にあった。現在膵臓癌と胆道癌の2種類の癌について進めているとのことだが、手応えは？また、DNAチップは13種類の癌を検知できるものだと理解しているが、今後の可能性は？

A. 当社のDNAチップは独自技術に基づく高い検出感度を武器としており、マイクロRNA解析において高い評価を得ている。19年4月8日にDNAチップによる膵臓・胆道癌検査キットが、厚生労働省の先駆け審査指定制度対象品目に指定された。当局のご指導を受け、早期の薬事申請を目指して開発を行っている。13種類の癌を検出する検査薬という報道があったが、これは当社からの発表ではない。基本的に、膵臓・胆道癌について開発を行っている。